

斎藤新太郎（二代弥九郎）について

小  
谷  
超

# 斎藤新太郎（二代弥九郎）について

小谷 超

## はじめに

幕末の剣豪として著名な斎藤弥九郎は、晩年の安政三年（一八五六）頃、篤信斎と号し、弥九郎の名は長男の新太郎が襲名した。新太郎は名を龍善といつ。我々は弥九郎というと初代の弥九郎を思い浮かべることが多いが、本稿では、二代弥九郎となつた斎藤新太郎に焦点を当てて論じていく。

その意図は、新太郎の行動が全国に斎藤弥九郎の道場練兵館を知らしめ、多くの人々が練兵館に入門するきっかけとなつたこと、とりわけ吉田松陰や桂小五郎らをはじめとした長州藩との関わりが強くなつたことを再確認することにある。そして幕末から明治維新にかけて活躍した志士たちとの繋がりを見つめることを通して、弥九郎や新太郎がこの時期に果たした役割等について明らかにしていきたい。

本稿では、大坪武門氏著の『幕末偉人斎藤弥九郎伝』や木村紀八郎氏著の『剣客斎藤弥九郎伝』にまとめられた成果に学ぶとともに、斎藤家から氷見市教育委員会に寄贈された史料等を参照しながら、斎藤新太郎の人生について通観してみたいと思う。

なお、新太郎の名は弥九郎を襲名した際、弟の五郎之助が襲名している。本稿では、初代弥九郎の長男である斎藤新太郎を一貫して「新

太郎」と表記し、後に篤信斎を名乗る初代弥九郎を「弥九郎」、二代目の新太郎を名乗る五郎之助を「五郎之助」と表記することにより、混同を避けたい。但し、史料を引用する時は原文どおり表記し、注記を入れる。

## 新太郎の生い立ちと青年期

『斎藤弥九郎関係資料調査目録』には、天保元年（一八三）八月二日付弥九郎の氷見にいる父新助宛書簡が収録されているが、その中に「倅義当年三歳に相成申候 斎藤新太郎と名付申候」とあり、出生は一年前の文政十一年（一八二八）である。弥九郎は寛政十年（一七八八）生なので、三十一年の時の子である。岡田十松の擊劍館から独立して、江戸俎板橋近くに練兵館を開いて間もない頃に生まれた長男であり、前掲書簡にも「只今までくらし方殊の外六ヶ敷様内々二仕置候當時身分くらし方差支も無之候間引取申候」と記されている。

練兵館主の長男なので、幼い頃から父につき、剣術の修行を行つていたと考えられるが、史料として確認はできるものは今のところない。少年期から青年期にかけて、剣術以外の他門への入塾等について確認できる史料について、以下紹介していくこととする。

天保十年（一八三九）、新太郎十一歳の頃には儒学者赤井巖三の塾に通つていることが、清水礫洲の「有也無也」に見える。

次に、山形県立博物館蔵「銃砲必書」には、天保十一年（一八四一）長崎町年寄で西洋砲術師範の高島秋帆が、砲術の諸道具を持つて江戸へ來るようにとの幕命を受け、同年一月に江戸に到着以降、入門した者の名を記した「受業性名」が含まれている。その中には、四月に

「斎藤三九郎」や「斎藤弥九郎」の名前とともに、「斎藤新太郎」の名が含まれている。新太郎十四歳のことである。

また高嶋秋帆が長崎に帰着した同年八月二十一日以降、あい無く送られた同年九月十一日付の秋帆の弥九郎宛書簡がある。その内容は、御令息の大病を心から案じており、名医の手を尽した治療を受けても回復しない時は、神仏の冥助を願い、特に待乳山天尊の浴湯祈念のご利益にすがり、「御令息ハ再び得難」へ、「天下のため惜しむべき人」なので、是非とも命が救われるよう陰ながら祈っている、というものである。「令息」とは、江戸滞在中の秋帆が西洋砲術を教授したことのある新太郎のことである。

続く翌年の天保十三年（一八四二）九月八日には、高嶋流砲術を指南することとなつた葦山代官江川太郎左衛門英龍（坦庵）に父弥九郎らとともに入門している。

このように、弥九郎の教育方針に従い、新太郎は様々な業を修めて成長していった。ただ前述のように時折大病することもあり、周囲に心配をかけることも多かつたようである。

## 剣術修行と全国行脚

戸羽山瀚編著『江川坦庵全集』別巻三に「弘化四年未年四月 都下諸流試合姓名帳 練兵館社中」という史料が収められている。その冒頭に掲載されている概要には他流試合が行われているようになつた総緯が記されている。その内容をまとめると以下のとおりである。

江戸の剣術道場は隆盛を極めていたが、負けた時の不名誉を思い、各流派は他流試合に対し消極的であった。坦庵はその現状を憂い、弥

九郎に対し他流試合を行うことを提案した。弥九郎は、練兵館の荒稽古は有名で、負ける心配は無いが、辻斬り、闇討ちの危険もあり、消極的であつたが、盟友のたつての提案であれば、断る理由も無かつた。弥九郎の呼びかけに応じ、江川屋敷に集まつて、協議をしたのは千葉、桃井、斎藤、男谷等十一の道場に過ぎなかつたが、坦庵は満足した。弘化四年（一八四七）一月、坦庵道場を皮切りに他流試合が始されたのである。

一月八日 田宮流の久保田助太郎道場へ新太郎以下十一名赴いた。

二月二十六日 鏡新明知流の桃井春咸道場へ新太郎及び歎之助以下十

十四名が赴いた。

三月一日 心形刀流の伊庭軍兵衛の道場へ新太郎及び歎之助以下十

三名が赴いた。

三月二日 北辰一刀流の千葉周作道場に新太郎及び歎之助以下十二

名が赴いた。

三月八日 直心影流の男谷精一郎道場に、新太郎及び歎之助以下十

三名が赴いた。

三月十八日、直心影流の団野源之進道場に新太郎及び歎之助以下十

一名が赴いた。

三月二十九日、柳剛流の岡田十内道場に新太郎以下七名が赴いた。

三月二十二日、一刀流の大久保九郎兵衛道場に新太郎及び歎之助以下七名が赴いた。

三月二十七日、一刀流の近藤弥之助道場に新太郎及び歎之助以下十

一名が赴いた。

三月二十八日、直心影流の横川七郎道場に新太郎及び歎之助以下三

名が赴いた。

この後、新太郎は諸国修行の旅に出る。昭和十四年四月十日発行の『高志人 斎藤弥九郎号』（第四巻・第四号）所収の斎藤福松氏（新太郎の子）「二代目弥九郎と諸国修行」には、「四月一日に江戸を出発したが、同行の士は五人で、新太郎を初めとして野原正一郎、清水牧太、山田惣次郎、細田泰一郎だった」とある。また木村紀八郎氏は、この旅について、第一には、練兵館の名を全国に広め、有為な人材を練兵館に集めるという弥九郎の意図があったこと、第二には江戸での他流試合を始めたときから、全国修行を意図していたこと、第三には、諸藩での試合が整然と行われていることから、江戸の各流派の道場に対し紹介の要請があつたのではないか、と推定している。

新太郎の全国修行については、二冊の記録が伝えられている。一冊目が弘化四年から嘉永元年三月までの「諸州修行英名録」であり、もう一冊が、嘉永元年四月から嘉永二年九月までの「修行中諸藩芳名録」である。

以下、新太郎らが訪問した藩名や訪問日、記録がある道場主やその流派等についてまとめたのが、以下の表1である。

表1

弘化四年 (不明)	(不明)	
常陸笠間城藩	自現流 (不明)	十名
一刀流 門人十五名	村上善太夫、村上亘 山本鉄之丞、広田屯	

四月十五日	常州下館城藩	示現流 桂木流	星野彦六 高橋友衛、門人十一名
四月十六日	下野壬生城藩	神道無念流 聖德太子流	上條信治、門人十二名 叶間半石衛門
四月二十三日	野州黒羽藩寺子住	神道無念流	熊久保弥右衛門、門人八名
四月二十四日	奥州白河城藩	一刀流	森元確齋、門人七名
四月一日	奥州会津城藩	同藩	三田大六、門人三十七名
五月一日	同藩	同藩	井深藏人、門人二十名
五月三日	奥州伊達郡湯村住	同藩	黒河内伝五郎、門人十二名
五月四日	奥州半田銀山住	同藩	藤田三郎兵衛、門人三名
五月十日	同藩	同藩	原勝馬、門人十八名
五月十一日	奥州仙台藩瓦住	同藩	佐久間正治、同佳次郎
五月十二日	同藩	同藩	酒井伝内、門人十九名
五月十三日	同藩	同藩	若林謙吉、門人十三名
五月二十四日	奥州石之巻住	同藩	小野惣七
六月十日迄	東奥松前藩	柳剛流	衛、小野文六郎、
八月二十七日ヨリ	同藩相館住	一刀流	岡田左馬之助、門人二十
九月二十九日ヨリ	同藩江差住	神道無念流	四名
九月二十六日迄		神道無念流	坂井厨右衛門、鎌田岡右
二十八日迄		柳剛流	衛門、飯田準太、
九月二十九日ヨリ	奥州津軽弘前城藩	一刀流	門人四十三名
小野派 一刀流	神道無念流	神道無念流	村田林八、外九名
須崎半兵衛、柿崎謙助、 門人二十名	三戸長次郎、外二十四名	神道無念流	

九月二十二日	摠州大坂住御鉄砲	真影流	津田武左衛門
九月二十六日	信州上田藩	目華流	若山栄次郎、門人六十九名
十月朔日	大坂玉造士	神力一刀流	村上武一郎
十月二日	大坂玉造与力	直心影流	西小弥太、門人二名
十月か	大坂天満	尼子次郎四郎、外三名	朝比奈陽之助、朝比奈栄
十月十六日	大坂玉造同心	一円番左衛門、門人六名	八ツ岡民部、門人七名
十月十九日	米津越中守藩	藤重良左衛門、門人六名	南槌之進、南長吾
十月二十一日	播州三日月藩	鈴木渡之助、吉田鉄五郎	河端老之助、門人三十二名
十月二十七日	作州勝山城藩	直心影流	松尾円八、門人五十四名、
十月二十九日	備中州松山城藩	理方一流	石坂早夫、門人三好八百蔵、門人十三名
十月晦日	予州今治城藩	自勝帰眞流	右於城内稽古場試合
十一月五日	予州松山城藩	一刀流	鹿師村重之助、門人十七名
十一月八日	同藩	直心影流派	丹下喜太夫、門人三十九名
十一月十八日	予州新谷藩	無三自現流	谷三次郎、門人四十六名
十一月二十九日	同藩	以心流	野呂完之助、門人二十八名
兩日	予州宇和島城藩	新当流	橋本弥伝次、門人十八名
十一月十八九	予州西條城藩	眞貫流	富田祐次郎、門人二十三名
十一月十八日	阿州藩閔邑住	以心得宗流	多都味嘉門、門人二十名
十一月十八日	同藩	柳生直陰流	秦勝三郎、門人三十九名
十一月十八日	同藩	田宮神劍流	森惣兵衛、門人二十五名
十一月十八日	同藩	田宮流	山根大藏、山根武五郎、

十一月二十九日	十一月三十日	十一月五日	十一月七日	十一月十八日	正月十日	正月十四日迄	正月十五日ヨリ	正月二十日迄	正月二十三日、二十五日	正月二十四日	正月二十六日
阿州徳島城須本藩	讃州入野山住	讃州高松城藩	讃州高松藩林田住	備中岡田藩	備中岡山城藩	備前岡山城藩	同州川辺住	備中州下原住	備前岡山城藩	同藩	同藩
神道無念流	関口一刀流	無相流	神道無念流	神道無念流	鏡心明智流	小野派一刀流	直心影流	神道無念流	直心影流	玉心琢磨流	無三自現流
筑前内	防州右田居住毛利	防州徳山城藩	同藩	防州岩国城藩	芸州広島城藩	同藩	同藩	阿部右源次、門人十五名	岸本鍼之助、門人二十三名	笛谷武四郎、門人十七名	岸本鍼之助、門人二十三名
三宅肇、門人二十五名	松村忠六、門人十五名	上原達蔵、門人十七名	中條秀次郎、門人十五名	中村三太左衛門、外六十	難波惣七、門人十六名	小田切郷左衛門、門人九名	太田藤左衛門、門人二十	阿部右源次、門人十五名	笛谷武四郎、門人十七名	笛谷武四郎、門人十七名	阿部右源次、門人十五名
三宅四日	三月六日	二月二十七日	二月二十四日	二月三日	二月五日	二月二十四日	二月二十七日	同一名	荒木裕、門人十名	山品本内蔵太、他九名	桂六左衛門、門人三十名
八名									筏次郎右衛門、門人八名	細六郎、門人二十名	長谷川藤次郎、門人九名
神道無念流	神道無念流	愛州神陰流	新陰流	貫心流	信拔流	備後三原城藩	同藩	桂六左衛門、門人三十名	山品本内蔵太、他九名	小田都築、門人十一名	岡崎佐左衛門、門人二十名

同藩	同藩	同藩	同藩	同藩	同藩	同藩	同藩	同藩	同藩	同藩	同藩
西肥大村藩	肥鹿藩	同藩	小城藩	五月朔日	閏四月十八日	閏四月二十三日	閏四月二十三日	閏四月二十三日	閏四月二十三日	閏四月十四日	閏四月十四日
五月六日	五月四日	五月四日	五月四日	同藩	肥前佐嘉藩	西肥蓮藩	同藩	対州藩	同藩	久留米藩	同藩
同流	神道無念流	大石神影流	新陰流	鉄人流劍術	真心影流劍術	真心影流劍術	タイ捨流劍術	心形刀流	愛洲神陰流	無双一躯流	直心影流
森重百合藏、門人一名	原口盛衛、門人五名	並木軍八、門人十四名	納富五郎太夫、門人十四名	鍋島邦衛、門人六名	福地助之允、吉村市郎太夫、門人二十五名	白浜次郎左衛門、門人十 三名	河内軍右衛門、広田長左 衛門、門人十三名	青木小藤太、門人七名	富永清太夫、門人九名	中嶋忠右衛門、門人十八名	今井静左衛門、門人九名
京都五六兵衛、世戸戸口紹 兵衛、門人十名	江寄市兵衛、門人二名	田尻藤太、加藤善右衛門、足達毛兵	寒田安左衛門、足達毛兵	門人十三名	津田伝、門人三十九名	加藤田平八郎、門人二十 六名	門人二十一名	門人二十六名	門人二十六名	門人二十六名	清水太郎左衛門、門人十 七名

五月六日	同藩	片山流	四天流	四天流	内海直人、門人二十名
五月十日	唐津藩	長崎藩	神陰一刀流	武信流	赤松次郎、門人四十五名
五月十四日	長崎奉行支配	長崎藩	真陰流	同流	村井嘉作、門人七名
五月二十四日	西肥大村藩	西肥唐津藩形	神道無念流	同流	小川水衛、門人十名
ヨリ二十七日迄	同藩	肥前平藩	四天流	森重百合藏、門人一名	原口盛衛、門人十名
六月二日	同藩	大村藩	心形刀流	一門	村井嘉作、門人十名
六月五日	同藩	同藩	片山流剣術	内海直人、門人二十一名	内海直人、門人二十名
六月九日	同藩	同藩	一心影流	小関三七、野元弁左衛門、門人十名	内海直人、門人二十名
六月十六日	筑州秋月藩中	筑州秋月藩中	一刀流	成田孫左衛門、門人七名	内海直人、門人二十名
六月十七日	同藩中	同藩中	四天流兵法	井元熊太夫、門人四名	内海直人、門人二十名
六月十九日	長州藩	長州藩	以心流	鳶田連久、門人一名	内海直人、門人二十名
八月十七日	長州藩	丹石流	丹石流	百東半左衛門、門人九名	内海直人、門人二十名
八月二十八日	長州藩	新陰流	片山流	松村長太夫、門人八名	内海直人、門人二十名
九月十四日	京都津和野藩中	新陰流	新陰流	鳶田仲、門人三十四名	内海直人、門人二十名
九月十六日	京都住	江流	江流	北川万蔵、門人百四十二名	内海直人、門人二十名
九月二十日	膳所藩中	神刀兌山流	神刀兌山流	馬來宗六、門人百八十九名	内海直人、門人二十名
与力	京都二條所司代組	四名	四名	内藤作兵衛、門人百九名	内海直人、門人二十名
直心影流	是心流	仁保友左衛門、門人二十名	平岡弥三兵衛、門人八十	吉田兵三郎、門人十二名	内藤作兵衛、門人百九名
直心影流	直心影流	浅田主計、門人十七名	四名	仁保友左衛門、門人二十名	内藤作兵衛、門人百九名
直心影流	直心影流	岡田東太郎、門人十六名	四名	吉田兵三郎、門人十二名	内藤作兵衛、門人百九名

この全国行脚の中で特筆すべきと考える一つの件について述べていく。

一つ目は、前掲の両史料にはその記録はないが、新太郎らは、東北から江戸へ戻る弘化五年（後に嘉永に改元）（一八四八）正月に水戸を訪れている。同月十八日付、藤田東湖の新太郎宛書簡が、大坪武門氏著『幕末偉人斎藤弥九郎伝』に掲載されている。その内容は、新太郎ら十人の壮士らに是非とも会いたいと思い、武田とも相談したが、この度はお招きしない方がいいとなり、大変残念である。酒肴を贈るので、壮士方へも少しずつでも配られたい、とのことであり、また追伸には、永先生に遣わされた「尚武論」を再三熟読し、感心したこと、他へも示したいので草稿のまま受け取ったこと、などが記されている。この中の「武田」とは、武田耕雲斎のことであり、「永先生」とは永井政介のことである。

藤田東湖は、弘化元年（一八四四）藩主水戸斉昭の致仕謹慎に連座して、役職罷免の上、蟄居を命じられて以降、江戸小石川藩邸で幽閉、本所小梅下屋敷に移されて引き続き幽閉の身となつて、二年半の時を過ごした。同三年十一月には幕命で蟄居は免ぜられたが、藩命により遠慮を申し付けられて、水戸へ戻り、城下の横竹熊の幽居屋敷に移されることになつた。同四年十月には再び隠居謹慎を受け、長年の幽閉生活もあつて家計は困窮を極めるとともに、持病の悪化もあり、鬱屈した日々を過ごしていた。

新太郎が著したとされる「尚武論」がどのような内容であるかは不明であるが、後期水戸学の精神的支柱となつた東湖の思想と近いものだつたのだろうと考えられる。

二つ目はいわゆる「黄金の鳥籠」発言の逸話についてである。大坪武門氏著『幕末偉人斎藤弥九郎伝』から当該部分（八九・九ページ）を引用する。

弥九郎の長男新太郎、武術修行の為門人数人と共に諸国遊歴の途に上り、初め東北に志し後関西九州に赴きたり。嘉永一年己酉三月十一日、長州萩の城下に乗込み旅宿に就き、宿の主人挨拶に來りし時、武術修行者たるの話出で、当地の模様を尋ねたるに、主人曰く、「当地は武芸盛にして、藩の明倫館新たに落成し、剣士雲の如し、今現に遠く聞ゆる竹刀の音は、即ち明倫館稽古の音なり」一行曰く、「夫れは樂みなり、明日は推参して是非試合を願はむ、定めて優秀の達人も多かるべし」と種々雑談の後寝に就きたり。

翌日一行明倫館に赴き試合を終り、帰来後一浴して晚酌を傾く宿の主人來り問ふて曰く「今日の御試合如何」と一行曰く「明倫館宏壯にして剣士雲の如し、而も眞の剣士は一人もなし、恰も黄金の鳥籠に雀を飼ふが如し」と、酩余の戯言、忽ち洩れて藩士の耳に入り激昂甚しく、一行を襲撃せむとす、老臣等鎮撫せむとするも及ばず、事態頗る急なり、即ち窃に一行に告ぐるに状を以てし急遽退去せしむ。一行夜中出発して九州に渡り、漸く事なきを得たり。

長藩に於ける血氣の青年等余憤漏すに由なく、一行九州に赴き不在中、急に江戸に往きて練兵館道場を襲ひ、猛烈に叩き潰して以て腹を癒さむと、この議賛せられて十数人一団となり江戸へ上る。

木島又兵衛、祖式松助等長藩士の一団数多の竹刀、小手道具を釣台に満載して練兵館に担ぎ込みたり。時に練兵館に新太郎の弟歎之助あり、年歎正に十七歳、剛勇無双にして人呼むで鬼歎と称し、お突きを以て得意とす。遠来の藩士等悉く鬼歎の為めに突き伏せられ、数日間食物を嚥下し得ず病臥したるものすらあり、遠征の目的全く破れ、敗軍の士空しく竹刀を肩にして長州に帰りたり。

この逸話の信憑性について考えてみたい。「諸州修行英名録」によれば、三月一日に岩国、四日に徳山、六日に防州右田、十日に府中（下関）そして三月十四日には九州の中津で試合をしており、三月十一日に萩に訪れた記録はない。また九州を目指している一行が、わざわざ遠回りをして萩へ向かうものであるつか。またこのことが事実だとすれば危険を顧みずに、六月に再び萩に入るものであるつか。

一方、前掲の斎藤福松氏の「二代目弥九郎と諸国修行」では、この間のことについて、「十日長州府中。一行はそれから長州藩萩の宿についた。この萩の宿で有名な新太郎の放言があり続いて明倫館の壮士が江戸まで乗込んで来て、留守番の歎之助にひどい目に遭うのである。」の騒動で藩の長老達のすすめにより潜かに萩を逃げ、三月十四日には豊前中津藩に来ている」と記述している。明治二年に新太郎の子として生まれ、父より直接聞くことのできる立場の人物がこの逸話を事実と捕らえているのである。

以上のように、これまでに知りうる事柄だけでは、その信憑性を確定付けるものではなく、研究を広げていく中で新たな史料等の確認に努めていきたい。

新太郎は、嘉永二年九月の膳所での試合を最後に、全国修行の一区切りをつけ江戸へ戻ったであろう。

## 再度の萩行と吉田松陰、桂小五郎らとの交流

嘉永四年（一八五一）四月、吉田松陰は兵学の修行として江戸へ派遣され、藩主の参勤交代に伴い初めて出府した。松陰二十二歳のことである。

松陰は江戸の長州藩邸に設立された藩士教育のための学校、有備館で学ぶとともに、朱子学者の安積良斎、兵学者の山鹿素水、兵学と砲術を修めた佐久間象山などについて教えを請うた。併せて江戸の諸氏とも交わりを深めていくが、その中で弥九郎や新太郎とも交流するのである。

吉田松陰の「未焚稿」には「剣客斎藤新太郎に与える書」が收められているが、この内容を要約すると以下のとおりである。

あなたが萩に来られた際には、剣の腕前は評判が高かつたが、私は田舎じみていると思っていた。また、あなたは詞章に巧みな人だと聞いていたが、文華なるのみと思っていた。そのため、お会いすることはなかつた。このたび江戸へ來たが、藩士の多くが、あなたに剣を習つていることを知つた。皆はあなたの武にして粗ならず、華にして実あら、毅然として志氣があると言つてゐる。私は驚いて、「この人があの時の人か」と思つた。萩でお会いすることが無かつたことを大変後悔し、すぐにでもお会いし、いろいろと議論をしてみたいと考えている。書をもつて、これに先んず。

この書簡が発せられたのは嘉永四年のいつかは不明であるが、松陰

の「辛亥日記」に「十月四日 斎藤弥九郎を訪ぶ」という記事があり、そのときまでは送られたものであろう。嘉永四年中の松陰と新太郎に関する記録はこれらの二点のみであるが、弥九郎や新太郎は有備館に招かれて剣術を教えていることもあり、接点も多かつたことであろうと思われる。

また松陰は、東北遊歴の許可を申請し、七月にはその許可を得ていたものの、過所（藩の旅行許可証）の発行には時間がかかった。松陰は待ちきれず十一月十四日、藩邸より亡命して東北行に出発したが、新太郎は松陰に対し、少なくとも五人への紹介状を松陰に渡していたのである。翌嘉永五年（一八五二）閏二月十五日付、新潟に在った松陰が萩の父、叔父、兄に宛てた書簡には、「斎藤新太郎御国へも参り候哉追々同人へハ懇意仕候既に此遊歴水戸にて永井政介・阿久津彦五郎・白川三田大六・会津井深某・新潟日野三九郎等新太郎力添書なり」とある。新太郎は全国修行等で知り合つた藩士を松陰に紹介しているのである。またこの書簡からわかることは、松陰が東北遊歴に出た後、合いを置かずして新太郎が再び長州へ赴く予定があることを松陰が知っていたことである。

しかし実際に長州へすぐには向かわなかつた。その前に福井の大野藩で剣術の指南を行つてゐる。大野藩七代藩主土井利忠公伝である「柳陰紀事」によると、嘉永五年四月末、新太郎は、津・萩・和歌山の藩士数人を従えて、初めて大野に入ったのである。そして利忠はこれを優待した。前々年の嘉永三年に大野藩士の内山介輔ら三名が斎藤弥九郎の門に入り、翌嘉永四年には藩に無念流が導入されていることから、大野藩より依頼を受けて訪問したのである。新太郎の来野を

聞き、多くの藩士が駆けつけて互いに技術を競つた。利忠はこれを臨観した後、新太郎を剣術督励のため自分の間留めるとともに今後も大野へ招いて教導してもらうことを依頼した。そして同年秋新太郎の長州行きに内山介輔が随行することになった。

そして嘉永五年八月、新太郎らは萩に到着した。まもなく新太郎は井上壯太郎を通じて松陰に詩を贈つた。松陰は九月四日付、新太郎宛書簡でその手紙を受けて、謝辞を述べている。書簡の内容は、江戸での数度にわたる交流を下さつたこと、東北遊歴の際の附書（紹介状）を託されたこと及び高章を賜つたことについての礼を述べている。特に東北遊歴について、紹介された人々と出会つた感想やその人物評について詳述し、加えてその行程を記している。また、幽閉されている今の心境について述べ、最後に水戸藩士特に永井政介の子芳介について高く評価している。

過所を得ずして東北遊歴に出、嘉永五年四月に江戸へ戻つた松陰に対し、藩邸は萩への帰國命令を出した。四月十八日に江戸を立ち、五月十一日には萩に着いている。その後、主に生家である杉家で謹慎し、藩政府の处分を待つ身となつてゐた。新太郎との書簡を往復させたのはこの時期のことである。

さて、新太郎らの今回の来萩の目的について、「防長回天史」<sup>②</sup>にはこのことについて以下のように記されている。

「九月、斎藤新太郎書を政府に出し、藩学内の修練は多く華法に流れ、自然志氣の懈怠を致し、遂に技能熟達の期なし。人物を選び江戸に遣り、広く諸藩の士と闘試せば、志氣は振起し、識見は開け技術には精熟し、人材養成の趣旨に適はんとて、関東修行の士を出さんこと

を申請す。」

また『忠正公伝』<sup>(2)</sup>「第八編藩政整理時代 第一章 弘化嘉永年間の教育(五) 第三節 他藩の武芸師範招聘」には新太郎が嘉永五年八月から九月にかけて萩に滞在したときの様子が詳しく記されているので、その部分について以下にまとめてみる。

嘉永五年八月十四日、新太郎は門人の杉田勝之進、佐久間孫之進、藤井完三郎、内山介輔、久保鼎を率いて萩に入り、同十七日から明倫館内で試合を行うと、その技量が抜群であったため、同十九日より宿泊の待遇を進め、暫く抑留させることとなつた。当時の密局日乗には、『斎藤新太郎門人五人を同道して萩に滞在し、日々明倫館に出て試合を行つてゐるが、先年参つた時は驕慢甚だしく、勝ちを貪り、掛声等も時々不遜の語を発していたが、この度はそれに引き換え、驕慢不遜の様子は少しも見えず、人を取り立てるなどを主にしてゐるようで、世間の人は、新太郎が人柄を偽り、藩臣に召抱えられたいとの思いを抱いているのではないかと、話をしている。』と記されている。新太郎等は九月に入つても萩に留まり、特に新太郎は剣術指南の命を押して、日々明倫館に出勤したが、その任を辞し近く江戸へ帰ることとなつたため、毛利敬親公は新太郎に小半紙十束金子五両、同道の五人に各二百疋を贈り、その勞に報いた。後の二十八日、明倫館で餞の宴を設けて新太郎を招き、御国鑄を与えた。

これより先、新太郎は父弥九郎の願意に基づき、父子共に江戸桜田邸に出入することを願い出していたが、十日に許可され、十三日に新太郎に通達された。

続いて、新太郎は指導する者の中から、内藤門弟の河野衛門、永田

健吉、馬来門弟の山田孫太郎の三人を優秀で将来有望なものと認め、江戸へ連れて行つて大成させようと、九月十八日に書を以つて出願した。藩の要路は新太郎の申し出を受け入れたが、剣術四家それぞれ一人ずつ派遣することを妥当として、希望者を募り、明倫館として各派一人ずつ選ぶこととした。その結果、馬来の門弟、山田孫太郎は養父病氣のためいくことができなくなり、代わりに財満新三郎が選ばれ、他に内藤門弟の河野衛門、平岡門弟の佐久間卯吉、北川門弟の林乙熊、それと新太郎が希望した永田健吉の以上五名を江戸へ派遣することとなつた。この外に自力修行の許可を得た桂小五郎、井上壯太郎を加えて毎日帰途についた。

前記の中に登場する長州藩士の中で、ここでは桂小五郎に注目したい。小五郎は、天保四年（一八三三）六月、代々藩医を務めた和田家に生まれた。ちなみに新太郎（文政十一年生）より五歳年少、松陰（文政十三年生）より三歳年少である。七歳にして桂家の養子となつた小五郎は、十二歳で明倫館に入学し、山鹿流兵学を教えていた松陰に入門した。新太郎が初めて萩を訪れた嘉永二年は小五郎十六歳で新陰流内藤作兵衛の門弟の一人であつた。先に述べた「修行中諸藩芳名録」にも内藤作兵衛の門弟の一人として名が記されている。

そして、新太郎が再び萩を訪れた嘉永五年九月、三年間の剣術修行の許しを得て、自費で以つて練兵館に入門するために、新太郎らとともに江戸へ向かうこととなつた。

小五郎は、江戸へ向かう道中について日記を残している。『木戸孝允遺文集』所収の「記事」<sup>(2)</sup>がそれで、嘉永五年九月晦日に萩を出て、

大坂、京都、伊賀上野、津、伊勢、鳥羽を経て桑名に到る道中について記されている。その間、各地で試合をしたり、名所を訪ねたりしたことかわかる史料である。また小五郎のその間の諸費を記した帳簿「小納戸御小遣控」<sup>(2)</sup>も残されている。

十一月には江戸に入り、小五郎は練兵館に入門している。嘉永六年正月に始まる小五郎の「日々記事」<sup>(3)</sup>も残されている。練兵館での剣術の稽古や兵学などの講義の様子その他余暇についても詳細に記されており、練兵館の実際を知りうる貴重な史料である。当然弥九郎や新太郎の事柄も多く見られる。また稽古休日の飲酒の様子も散見される。

### ペリー来航後

小五郎が練兵館で修行中の嘉永六年（一八五三）六月三日、浦賀に黒船が来航した。「日々記事」にも翌日の四日の記事には異国船の風評があると記され、日を追つてその騒ぎが大きくなつていく様子が記されている。小五郎は長州藩の警護の持ち場である大森海岸へ赴くよう命じられており、六月十二日異国船が退帆した後は、弥九郎や新太郎、周布政之助などと海防や攘夷のことについてこれまで以上に熱心に議論している。

黒船退帆後まもない六月二十五日、新太郎は越前大野藩主土井利忠に伴つて、大野へ赴いた。昨年の約束どおりである。そして九月七日、利忠は、今後毎年五人口の給与を与えることでその勞に報いることとした。<sup>(4)</sup>

新太郎は、大野から江戸への帰路、松代の斎藤新蔵へ立ち寄った。

『高志人 斎藤弥九郎号』には新太郎がその時記した書の写真が掲載

されている。「松代の斎藤大人いともねむ」といに我を引やとめ玉へて東路にあくる年の春はまたこと船のくるよし、いと世の中もおだやかならねば、わが身重て来べくとも、まづ此度は急き立 見んどし信濃なる 雪ふみ分けて あづさ』ひきかへすなり 我は東に』とある。<sup>(5)</sup>ペリーは来春の大騒動に思いをやりながら、新太郎は松代を後にしたのである。

嘉永六年十二月、長州藩江戸藩邸から弥九郎と新太郎宛に書簡が届いた。<sup>(6)</sup>その内容は、この度、相模国の海防を長州藩に委ねられ、異国船が到来し、幕府より指図があれば速やかに出張る必要があるので、入塾する桂小五郎ら六名を麻布の下屋敷に引き取りたいとの書簡であった。これに答えて、弥九郎らは長州藩に対しても以下のような建議を行つてている。

ジョン万次郎から聞くとアメリカは砲術だけでなく槍や剣の稽古が行き届き、柔術まで行つてゐるため、その戦いは一筋縄ではいかない。本来なら多くの西洋式台場を築き、大砲を備え、軍艦を整備すべきであるうが、そんな時間は無い。こうなれば相手の十倍の人数で我らが長じてゐる槍や剣で攻め入るしか方法は無いと思われる。そのためにもアメリカの戦法をよくよく研究し、最後は必死の覚悟で戦つべきである、というものである。藩主出馬の際には、新太郎や門人もはせ参じる覚悟であると付け加えている。

### 弥九郎を襲名

本稿冒頭に記したとおり、新太郎は「弥九郎」を襲名するとともに、

道場練兵館を継承した。安政三年（一八五六）八月の「葛飾御屋敷御調練場拝借之儀二付奉願候書付」<sup>(2)</sup>で連名で願い出ているのが管見では初出であり、この頃であるうと思われる。

弥九郎襲名後的新太郎の足取りについて、弘化から嘉永年間に比して詳細な史料がそれほど多くは残されておらず、斎藤家伝來の史料（現氷見市教育委員会蔵）のものを中心にたどりしていく必要がある。

（「」へ提出するために記したものか不明であるが、明治四年（一八七二）に新太郎が記した短冊の史料<sup>(3)</sup>がある。「御扶助高百俵 高現米十六石 生國武威 内藤駒次郎触下斎藤弥九郎（註 新太郎のこと）未歳四十四」と記された後に以下のとおり自らの経歴を書き記している。

文久二壬戌年十一月十一日剣術熟練之趣二付咸米式百俵一而旧幕府江抱入相成同三癸亥年十一月十一日剣術教授役被申付慶心二丙寅年四月廿日遊撃隊肝煎役被申付同三丁卯年八月六日小十人席歩兵指図役並被申付於横浜西洋練兵伝習被申付同四戊申年一月五日大番席歩兵指図役撤兵指図役兼勤被申付同年六月廿日勤仕並被申付同年八月廿八日被召出鎮守府支配被仰付同十月廿日行政官支配ト被仰出明治一己巳年七月八日弁官支配ト被仰出同年十一月一日東京府貫屬士族被仰付候

この経歴書によれば、文久二年（一八六二）に幕府の剣術教授の役に任じられてから、引き続き慶応四年（一八六八）まで幕府に仕えていたこととなる。慶応四年は、戊辰戦争が勃発した年であり、新太郎は幕府軍に属し、新政府軍と対峙しなければならない立場であつたである。しかし、このころの新太郎の実際の動きについては不明であ

## おわりに

紙幅の都合により、明治期以降の新太郎については概略を述べるに留めたい。

番町にあつた練兵館は、招魂社（現靖国神社）建立のため立ち退きが必要となり、牛込に移転している。また弥九郎が代々木山荘で始めた製茶を引き継ぎ生業とした。<sup>(4)</sup>

明治一年頃、盜賊風体のものに襲撃され、深い傷を負つという災難にも見舞われている。<sup>(5)</sup>

明治十五年になって、東京集治監看守長を内務省から命じられ、明治十九年まで勤めている。そして明治二十一年八月五日、六十一歳で生涯を閉じている。<sup>(6)</sup>

ここまで、新太郎の生涯、特に弘化、嘉永年間の青年期を中心にして史料に基づきながら述べてきた。吉田松陰と桂小五郎については、新太郎との出会いによって、その後の人生に影響を受けている。特に小五郎については、新太郎の帰東にあわせて江戸へ出てきたことが、練兵館に入門するきっかけとなり、大きく飛躍する契機となつたと言つても過言ではない。

本稿は、大坪武門氏や木村紀八郎氏の大部の著書で紹介されたものの中から、新太郎の生涯にかかる部分を抜き出し、時系列に紹介したに過ぎず、改めてこうして報告する必要性を疑わないでもない。しかしながら、両書は、あくまでも父弥九郎を中心に語られている

る。詳細に調査した上で、別途報告したいと考えている。

ために新太郎の事績については副次的に記述されているだけである。

本稿によつて、こうして焦点を当てるににより、新太郎の存在や行動について衆目が集まること、そして一層新太郎に関する研究が進むことを期待したい。

(おだに すすむ 氷見市職員・氷見地域史研究会々員)

京橋堂出版 大正七年

鳥影社 平成十六年

氷見市教育委員会 平成五年

同右 七四ページ

洋学者弾圧事件として知られる斎社の獄に際し、「安積良斎塾生石倉典太は、師の命を帯び先人（筆者注 清水赤城のこと）の許に來り、昨夜弥九郎も召捕はれたりとの話あれども、真美なりやとの事なりき。先人は最速問合はすべし、余に命ぜられたれば、即夜余は斎三を訪ひ其事を質せば、弥九郎は別條無るべし、併は既に今日稽古に來りたり」とある。（「有也無也」『華山掃苔錄』井口木屋編著 豊川堂 昭和十八年 二七七ページ）

川瀬同 「山形水野藩秋元家文書と秋元家について」 山形県立博物館研究報告第十三号 山形県立博物館 平成四年

斎藤篤信斎往復書（金沢市立図書館加越能文庫蔵）

巖南堂書店 昭和五十七年

翁久允編集 高志人社 昭和十四年 六三ページ

『剣客斎藤弥九郎伝』二三、二 四ページ

元東京斎藤本家蔵 現在氷見市教育委員会所蔵

表一では弘化四年十一月二十日に越後国水原で試合をし、三ヶ月飛んだ翌嘉永元年三月に新潟で試合をし、下野、上野を経ていることとなつていて。その空白の三ヶ月の間に水戸を訪れ、再び新潟に戻ることは不自然であるため、木村氏は清書時に月日を書き誤ったのではないかとしている。（『剣客斎藤弥九郎伝』二一 ページ）

『吉田松陰全集 第一巻』山口県教育会編纂 岩波書店 昭和十一年 一九六三ページ

ページ  
『吉田松陰全集 第五巻』山口県教育会編纂 岩波書店 昭和十年 一一七

ページ  
大野市史第六巻 史料総括編 大野市史編さん委員会編 大野市 昭和六十一年  
同右三七九ページ  
同右三八 ページ  
幕末偉人斎藤弥九郎伝 九五、九六ページ  
防長回天史 第一編（一）末松謙澄 大正十年 一二 ページ  
毛利文庫（山口県文書館蔵）、このことについては、木村高士氏著『長州藩相伝神道無念流』新人物往来社、平成二年に詳しい記載があり参考とした。  
木戸孝允遺文集 妻木忠太 泰山房 昭和十七年（続日本史籍協会叢書）

日本史籍協会編 東京大学出版社発行 昭和五十七年復刻 第四編  
同右所収  
『大野市史第六巻 史料総括編』三八一ページ  
幕末偉人斎藤弥九郎伝 六五ページ  
『高志人』六五ページ  
幕末偉人斎藤弥九郎伝 九一～九四ページ  
毛利文庫（山口県文書館）「文武御興隆沙汰控」  
斎藤家史料（氷見市教育委員会蔵）、「斎藤弥九郎関係資料調査目録」では一六六で整理されている。  
幕末偉人斎藤弥九郎伝 一八二ページ  
同右一八 ページ  
斎藤家史料（氷見市教育委員会蔵）、「斎藤弥九郎関係資料調査目録」ではその辞令が二七八で整理されている。